

---

# 花屑プロローグ2 走っていくどこまでも

霧香 陸徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花屑プロローグ2 走っていくどこまでも

### 【Nコード】

N3887D

### 【作者名】

霧香 陸徒

### 【あらすじ】

花屑に所属する「芽衣」は一人戦場を歩いていた。一人の少年と出会い、そして「敵」とも出会ってしまう・・・

栄光に向かって走る

あの列車に乗っていこう

裸足のままで飛び出して

あの列車に乗っていこう

見えない自由が欲しくて

見えない銃で撃ちまくる

本当の声を聞かせておくれよ・・・

そんな詩を何処かで聞いた事がある気がする。

それはいつだったか・・・。

大好きだった父が歌っていた歌だっただろうか・・・。

古ばけたジャケットに、悲しいようで逆に元気な弾みのあるテンポでその歌を聴いた気がする。

私はある隊の狙撃手で、銃の扱いには慣れていたが、その銃で致命傷を与える事には慣れていなかった。

その銃で狙うのは相手の敵意。それさえ撃ち貫けば、私は生きながらえていける。何も命まで奪う必要は無いハズだ。

自由が欲しくて……。打ち続ける銃で、私は何人もの敵を打ち倒してきた。

その銃では相手の痛みを知る事は出来ない。ただ、無機質な音と共に有機質な「物」を地に伏せさせるだけだ。

だけど、両手は銃を構えているから……。音までは消し去つてくれない。目を閉じてでも聞こえてくる……。悲鳴。

聖者にはなれない。だから、いや、だけど生きている方がいい。

誰も死なせたくない。

でも、私には居場所が無くて、人を傷つける軍隊に所属している。

「そんな甘い考えだと、貴様いつか命を落とすことになるぞ！」

そう言って私の頬を叩いた前期の隊長は私より先に命を落とした。

だけど、それは彼の考えが間違っていたという証明では無く、ただ運が悪かったただけだ。

今の隊長は私を認めてくれているけど、彼女が死なないのは運があるだけだ。

そんな答えがどちらでも良いかのように、人は死に、そして生きる。

「おねーちゃん。 兵隊さん？」

小さな子供が居た。

まだ5つぐらいの男の子だった。

私の軍服のズボンを引っ張って見上げてくる。

「うん。 君は何歳？」

「ぼく〜？ え〜と、え〜と・・・。 あははわすれちゃったあ〜」

「そう・・・。 お母さんとお父さんは？ 君一人？」

「・・・うん。 この前黒くなつて動かなくなっただよ。 ずっと動かないから僕一人で来たんだ。 えらいでしょ？」

「・・・どうしてここへ？」

「・・・ここに行けっとお母さんが言っただよ。 黒くな

る前に」

男の子の目には涙も無かった。今おかれている現実を受け入れられないのか、それとも理解出来ていないのか……。たぶん後者だろう。

「……………此処は戦場だから、此処じゃなくて兵舎まで行かないといけないね。僕、まだ歩ける？」

「うん。お姉ちゃんありがとう」

ありがとうなどと言われたのは何時ぶりだろう。その姿は汚れきっていたけど、男の子の目はとても綺麗に輝いていた。

だから 少し胸が痛んだ。

これからこの子は兵舎に連れて行く。

そうなれば民間人としてではなく兵隊として育てられることになるだろう。

一人でも多くの戦力が欲しい時代だ。民間人も軍人も無い。ましてや、国民全員に徴兵勧告がなされているので、それ以外は非国民として国家に追われる生活をするだけだった。

そうやって、陰に隠れて生きる人々を臆病者だと笑う者がいる。

実際は軍規に従いながら生きている私達の方がよっぽど臆病者だというのに……。

ズキューン！

銃声が響いた。

悠長に考え事をしながら歩いている場合では無かったようだ。  
私は男の子の手を引いて走り出す。

歩幅が合わなくて何度も転びそうになる男の子。

抱えた方が早い！？

また銃声。 近い。

走りながら装備を確認する。

セミオートの短銃が一丁。 アーミーナイフが一丁。

後は・・・TAMの起動リモートコントロール。 TAMとは我が部隊の主力となる機動兵器の一つだ。 人型のロボットだと言え  
ばわかりやすいだろう。

それを使っても基地から現地まで到着するまでに私は物言わぬ人  
形となっているかもしれない。 いちいち呼び出して使うのは、ま  
だまだ実用性に改良の余地がある。

私は男の子を引っ張る手に力を込めながら、空いた手で短銃を取り出した。

中に入っているのはもちろん実弾だ。訓練弾では無い。

当たり所が悪ければ相手を × してしまうだろう。

だが、やらなければやられてしまう。

私は保険としてTAMのスイッチも押しておく。

これで数分後には基地から射出されるだろう。

敵は・・・、気配からどうやら2人ぐらいだと感じた。

巡回中か何かに見つかってしまったのだろうか・・・。  
運が悪い。

後ろから追ってくる気配に焦りながらも足を前に動かす。止まったら・・・命は無い。

威嚇射撃で数発後ろの敵へ撃ち込んですぐに前に走り出す。

・・・実際に止まらなくても命は無かったのだが。

後ろばかり気をとられていて前から近づく人影に気付かなかった。



その者はもちろん味方ではなく、私はその敵に自分から飛び込むような事をしてしまったのだ。その反動で短銃を取り落とす。

すぐにナイフに持ち替えようと手を伸ばすとその手を掴まれてしまった。

腕が折れそうぐらいに強く握られて痛い。

「あん？　なんだ　　国の者か。　もう一人はガキ・・・けっ！  
男かよっ！」

敵の男は私達を舐めるように観察すると、そう吐き捨てて、手に持っていた銃を・・・撃った。

グシャ！

サイレンサーが付いていたのか発砲音は無かった。　だから、現実味の無いそんな何かがつぶれたような音が聞こえてきた。

・・・

真横から

「女あ！　お前はウチの隊で「働いてもらっ」ぜえ！」

敵の男が何か言っている。　男が言う「働く」とは別に寝返って戦えと言っているわけじゃない。

・・・下衆野郎。

反射的に殴り飛ばしてやりたかったが、どうにも捕まれた腕は動きそうに無かった。

そんな事より、私は足元が赤く染まってしまった事の方が衝撃的だった。

その事を私の脳はどう処理しているのか・・・。自分の事なのに、何も分からなくなってきた。強烈な吐き気を感じた。

「最近お前等の国に女だけのチームだかなんだか出来たらしいじゃないか？ 要はオトリ部隊だろ？ かわいそうになあ？ トカゲの尻尾みたいに切り落とされる役なんてなあ。そうでああ名前は何だったけえ？ 鼻紙だったかあ！」

嫌らしい目付きと口調と手付きで言ってくる男。

「・・・！」

私はそれに弾かれた様に反応していた。

露出が少なく硬い材質の軍服からでも充分不快だった。

更に不快だったのは、彼の最後の言葉だ。  
鼻紙と言った。

私はそれが許せなかった。

彼が言った言葉は私では無く、私の隊長への侮辱だったのだ。

自分は何を言われても、何をされても構わない。  
だけど私の居場所を！仲間を侮辱する輩は許さない！！

.....  
.....。

死ぬヤツは運が無かったからだ。

私は運が悪い方だから良く死にかける。

今だって少し横にずれていたら死んでいただろう。

私の横には.....

呼び出しておいたTAMが鎮座していた。体長7m程の小柄な機体だが敵を圧死させるには十分の大きさだった。

先程の男はTAMの下敷きになって死んだ。タイミングとしては最悪で最高。

銃で引き金を引いたのとなんら変わりも無い状況だからだ。

彼が死んだのは運が悪かったからだ。

「TAM-07ヒナギク・・・」

私は愛機の名を呟いていた。テクニカルオートマターの7号機。機体は白を基にしたカラーリングで、足元の血が余計に目立ってしまっていた。

遂に汚れてしまった。敵の血で・・・。

「・・・・・・・・」

私は無言でTAMのコックピットへ乗り込んだ。

敵はまだ居る。

死ぬわけにはいかないのですばやく乗り込み、サーチシステムを立ち上げる。様々な電子音と共に出された検索結果は私を中心に10人程の敵と3体程の旧式の敵TAMが居るようだ。

「・・・・・・・・帰還します」

「サー・メイ軍曹」

この程度なら抜けられる。これ以上この機体と私の心を汚したくは無い。

帰還するために機体が立ち上がる。

すると、その下敷きになっていた者の姿があらわになる。

敵の兵と・・・・・・・・男の子であった「物」。

「・・・・・・・・！！ヒナギク！命令をキャンセル！攻撃指定！目標15時、17時！6時の方向の敵TAMに反応弾をシュート！その他歩兵にサブバルカン一斉放射！」

あの男の子も運が悪かったからだと言うのか！

「サー・メイ軍曹。これより敵を殲滅します」

「プロテクト・メイの解除を許可します！」

「サー」

プロテクト・メイ。私が組み込んだプログラムで自動的に相手のTAMの間接部分を狙うように設定してあるプログラムだ。その他に歩兵部隊には当てないように威嚇射撃するように設定している。

それを解除だ。

皆殺しにしてやるのだから・・・。

私に出会った事がお前達の運の尽きだったんだ！

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ！……！」

5分後・・・。

破壊を尽くしたTAMが活動を停止していた。性能の差でこちら

はまったく無傷だ。

・・・傷があるとすると・・・。

「ヒナギク。 基地への帰還」

「サー・メイ軍曹。 お疲れ様です」

ただのオペレーターシステムの癖に「お疲れ様」なんて言う。  
特に感情があるわけでは無く、そういうプログラムだ。 もし、感情があつたなら・・・いつもと違う命令をした私へ何か言ってくれたのかもしれない。

・・・

私は基地へ帰還した。

弱い者たちが夕暮れ 更に弱いものを叩く その音が響き渡れば  
ブルースは加速していく

見えない自由が欲しくて 見えない銃を撃ちまくる

本当の声を聞かせておくれよ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3887d/>

---

花屑プロローグ2 走っていくどこまでも

2010年10月11日08時08分発行